番茶も出花（でばな）

橋田壽賀子

ラインブックス

番茶も出花（でばな）

橋田壽賀子

ラインブックス

橋田壽賀子（はしだ すがこ）

1925年（大正14年）、韓国・ソウル生まれ。
日本女子大国文科卒業後、早稲田大学芸術科を経て松竹に入社。59年フリーとなりテレビドラマの脚本に専念。「となりの芝生」「夫婦」「道」などの連続ドラマがヒット。ＮＨＫ連続テレビ小説「おしん」（83年）や、「おんなは度胸」（92年）「春よ来い」（94～95年）、ＮＨＫ大河ドラマ「おんな太閤記」（81年）「いのち」（86年）「春日局」（89年）、ＴＢＳ連続ドラマ「渡る世間は鬼ばかり」（90年、93年）など数々のヒット作を生み、幅広い視聴者から大好評を得る。79年放送文化賞、84年菊池寛賞、88年紫綬褒賞など多数の賞を受賞。92年橋田文化財団を設立、理事長に就任。

※本書は平成９年10月より、ＴＢＳテレビで放映されている橋田壽賀子脚本のドラマをもとに、中野玲子氏が小説化したものです。

番茶も出花

第一刷――一九九八年二月二十五日

著者――橋田壽賀子

発行者――高部　務

発行所――株式会社ラインブックス
〒162東京都新宿区山吹町364番地
ＳＹビル２Ｆ
編集部03―3268―0690
営業部03―3268―0643

印刷・製本――中央精版印刷株式会社

©SUGAKO HASHIDA

1998 Printed in Japan ISBN4-89809-011-7 C0095

番茶も出花

でばな

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

【目次】

一 …… 6
二 …… 38
三 …… 54
四 …… 68
五 …… 96
六 …… 124
七 …… 136
八 …… 144
九 …… 154

十 …… 168
十一 …… 180
十二 …… 188
十三 …… 198
十四 …… 208
十五 …… 222
十六 …… 240
十七 …… 266

制作協力・写真提供――TBS
編集――大坪靖枝

橋田壽賀子ドラマ『番茶も出花』

スタッフ●制作著作　TBS
脚本　橋田壽賀子
プロデューサー　和田　旭
演出　井下靖央
川俣公明
音楽　ボブ佐久間
主題歌　『雨上がりの星空』　一路真輝　（東芝EMI）
作詞：とみたきょうこ　作曲：ジョー・リノイエ

出演者●丸田　信太郎　小林桂樹
加世　泉ピン子
綾　一路真輝
浩史　山口達也
●竹下　明生　阿部　寛
茂子　野川由美子
正造　綿引勝彦
●川本　和　えなりかずき
剛　森　廉
桃　三村有己
●長野　豊　井上　順
則子　赤木春恵
●太一　松村雄基
●京平　山田雅人
●秋子　小川範子
●リキ　光本幸子

ナレーション　森 光子

放送　TBSテレビ系列　木曜日　21時～21時53分
1997年10月2日～1998年3月26日

夕闇があたりを包んでいる。勤務先の結婚会館『寿閣』を出た丸田加世は、家路を急ぐ人の群れを眺め、フッと吐息をついた。

加世は高校卒業後、事務員として結婚会館に就職した。以来勤続十五年余り、現在は貸衣装の担当をしている。この日も、次から次へと訪れる、結婚式を間近に控えた娘たちの花嫁衣装の相談相手で、一日が終わった。退社時刻には体がこわばるのも当然だ。

――もう三十五になるんだもの……。

疲労感は年齢のせいだと、加世は自分に言いきかせようとする。が、本当はちがう。

加世には人一倍結婚願望があった。自分が美人でないというコンプレックスを抱えているせいか、いい相手に恵まれず、いまだに独身である。そのため、毎日のようにしあわせいっぱいのカップルを見ていると、疲労が蓄積されるのである。

正面玄関から歩道に下り立ち、人の流れに身を投じようとしたときである。後ろで「加

世さん」と、呼び止める声が聞こえた。
振り向くと、恋人・長野豊が、笑みを浮かべて立っていた。豊はインテリア・デザイナーで、40歳になる。離婚経験者の彼は、母親と都内で二人暮らしだ。
「ちょうど君が帰る時間になったから待ってたんだ。引き止めるつもりはないよ。けど、いつまでこんな状態が続くのかと思ってさ」
豊に真正面から見つめられ、加世はドギマギして視線を逸らした。
「だから、私たちのおつき合いはなかったことにしてくださいって申し上げたはずです」
「そりゃあ僕はバツイチだし、うるさいおふくろもいる、結婚の相手としての条件は最低だ。無理押しする資格なんてない。けど、君とはもう五年もつき合って、君だって、一度はそのつもりになってくれたんだ。いくら君のほうの事情が変わったって、僕の気持ちは変わりやしない。とにかく君のお父さんにお話して……」
「うちは、今、私がお嫁にいけるような状態じゃないの。だから、あきらめるより他ないの。長野さんなら、私みたいな女、待っていなくたっていくらでもいい人がいるでしょ」
三十を過ぎると、結婚相手に贅沢は言えない。そんな加世にもようやく恋人ができた。これが最後のチャンス、と結婚を決意した矢先、母親が急死した。三年前のことだ。
運送会社を経営する父は仕事に追われ、家の中では縦のものを横にもしない。就職した

ばかりの妹や、大学受験を控えた弟には家事は任せられない。加世は事情を話して、豊に結婚を延期してもらった。以来、家族の母親代わりを務めている。

「家族を捨てて、私ひとりがしあわせになる訳にはいかないの。うちは家族が助け合って生きていかないと、やっていけないんだから……。もう私を待たないで」

自分でも損な性分だと思うが、損な性分に生まれついているからしかたがない。

この日も、加世は豊の視線を避けたまま、そそくさと家へ帰ってしまった。

加世の家は東京の下町。荒川の近くにある。木造二階建ての一軒家だ。

数百メートル離れた川沿いの通りに、父・丸田信太郎が経営する運送会社があった。経済成長期には大会社との取り引きもあり、トラックを五～六台そろえて大々的に事業をしていたのだが、バブルがはじけてからは競争が激しくなり、誠実で生真面目なやり方では運営が難しくなった。生き残りを賭け、信太郎は家族に内緒で、全国にチェーン店を持つ引っ越し専門会社の傘下に入った。このところ信太郎は多忙だ。

次女の綾はエアロビクスのインストラクターをしていて帰りが遅い。末っ子の浩史は大学生だが、これもアルバイトだ、デートだと夜遅くまで出かけている。

加世は急ぎ足で家の前まで来ると、灯が消えたままの家を見てホッと息をついた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

バッグから鍵を出して、玄関の扉を開ける。居間へ入って電気を点けた。会社帰りにスーパーで買った食料品の袋をテーブルの上に置こうとして顔をしかめる。部屋は乱雑にちらかり、テーブルの上には汚れた食器がそのまま置かれていた。

「なによ、自分が食べたものくらい自分でかたづけなさいって、いくら言ったってこれなんだからぁ……。みんな私のことあてにして、掃除しようなんて気持ち、ないんだから」

ブツブツ言いながらも、エプロンをつけ、手早く夕食の支度にとりかかる。夕食の下ごしらえをすませて信太郎の布団を敷き、シーツやカバーを取り替え、洗濯をして、掃除をする。短時間に家族四人分の家事をこなすのだから、大忙しである。夕食の準備が整い、洗濯物のアイロンかけまで終えて時計を見ると、すでに九時半をまわっていた。

食卓の椅子に腰を下ろし、加世はうらめしげにテーブルの上の料理を眺めた。お腹がグウグウ鳴っている。空腹をまぎらわそうとテレビをつけ、観るともなく観ているうちにまぶたが落ち、加世はいつのまにかテーブルの上に突っ伏してうたた寝をしていた。

「こんなうるさいテレビ観ながらよく眠れるねぇ」

突然、耳元で声が聞こえた。いつ帰宅したのか、綾がプツンとテレビを消した。

「なによ、人が観てるのに……」

「よく言うよ。ブザー鳴らしたって、寝てて聞こえなかったくせに……」

「いやだ、もう十時すぎてるじゃない」加世はガバッと身を起こすと、「何してたの？」
姉の問いには応えず、綾はテーブルの上の料理に目をやる。
「お父さんも浩史もまだなの？」
「あんたご飯は……？」
「すませてきた」
「なんだ、一緒に食べようと思って待ってたのに……。おそくなるのならなるって、ひとこと電話してくれたらいいでしょう。少しは待ってるものの身にもなって欲しいわッ」
「わかってても、そうはいかないときもあるの。最後のレッスンの奥さま連中に誘われちゃってぇ。インストラクターも客商売なの。ああ、疲れちゃった。お風呂へ入って寝る」
「あんたの洗濯物……。アイロンかけるものは、ちゃんとかけといたわよ」
「洗濯物なんてほっといてくれたらいいって言ってるでしょう。時間のあるとき、いっぺんに洗うんだから。大きなお世話なんだよね」綾は肩をすくめた。が、加世がムッとしたのを見て、「お姉ちゃんだってお勤めしてるの。人の心配まですることないの。申し訳ないよ」と、言い直す。「ありがとう、お姉ちゃん。ほんとは洗濯物助かってるんだ」
「ついでなの、気にすることないの」
加世が苦笑したとき、玄関の開く音がして、浩史が帰って来た。綾は自分のことは棚に

上げ、「お姉ちゃん、お夕飯食べないで待ってたんだよ」と、弟に文句を言った。
「誰も待ってくれなんて言った覚えないよ」浩史はうるさそうに応えると、「俺はもう子供じゃないんだ。加世姉ちゃんが夕飯こしらえて待ってるからって、そのために帰って来る訳にはいかないの。そんなものに縛られるくらいなら、待っててもらわないほうがありがたいよ。いい迷惑だよ」
「まだ親のスネかじってる大学生が、よくそんなえらそうなことが言えるわねぇ。お姉ちゃんだって自分のしたいことあるのよ。それでもお勤め終わったら真っ直ぐ帰って来て、自分のことは犠牲にして家のことしてくれてるの。誰のためだと思っているのよ」
「そういうのがたまらないって言ってるのッ。恩に着せるくらいなら、ほっといてくれたほうがましなの。お姉ちゃんだって、自分の好きなことしたらいいんだよ」
「よくそんな罰当たりなことが言えるわねッ。お姉ちゃんに謝りなさいッ」
「いいのよ」加世が二人の間に割って入って、「あんたにだって、浩史を叱る資格なんてないでしょう。私が勝手にやっていることなんだから……。浩史の言う通りよ。私はこの家の長女だって責任感じてて、頼まれもしないのに……。私がバカなの」
「そうだよ、長女もヘチマもありゃしないの。アーちゃんも俺も、もう一人前なんだ。姉貴が家族の心配することなんてありゃしない、自分のことだけ考えてりゃいいんだよ。俺

はね、たしかに親父のスネかじって大学へ行ってる。けど、家庭教師のバイトもやってるし、遊ぶ金くらい稼いでる。大学出たら最後、自由なんてありゃしない。今のうちに自分の好きなことする。俺のことは、ほっといて欲しい」

「何よ、一浪してさんざんお姉ちゃんに迷惑や心配かけて、やっと大学へ入れたくせに」

姉弟三人が言い争っていると、玄関のドアが開く音がした。

「父さんだ。ほっときゃいいわよ。また酔っぱらってるに決まってる」

案の定、信太郎のご帰還である。女の声が聞こえているところをみると、酔っぱらって行きつけの小料理屋の女将に送ってもらったのだろう。

信太郎は居間の食卓の上の料理を見ると、「え？　みんな夕飯まだなの？」

加世は父の腕をとって椅子に座らせてやった。「お父さんも食べてきたんでしょ。酔ってたらお風呂は無理ね。布団敷いてある。早く寝たほうがいいわよ」

「かわいそうに、お姉ちゃん食べそびれちゃってぇ」

綾が言うと信太郎は驚いて、「加世、まだなのか」

「みんなを待っていたの。一緒に食べようと思って……」

「お父さんだって、外で食べてくるんだったら、ひとこと電話くらいしたってさ」

「お父さんはまだだよ。加世、一緒に食べよう。夕飯を楽しみに帰って来たんだから」

「やっぱりお父さんだ、いいとこある。シチューなの、あっためてくる」
加世はいそいそと席を立とうとする。と、綾が加世の腕をつかんで、
「お姉ちゃん、お父さん食べないよ。寝ちゃってる」
信太郎はテーブルの上に突っ伏して鼾をかいていた。
「なにも、私に気を遣うことなんかないのにねぇ。そうよね、お父さんだって、もう私なんかいなくたっていいのよね。将来の見通しがついて、暮らしが安定したら、再婚だって出来るだろうしさ……」
「お姉ちゃん……？」
「あんただって、浩史だって、おんなじ……。私が家のことしなきゃ不自由な思いさせるって母さんの代わりしてきたけど、二人とも立派に自立出来て、私のすること、かえって迷惑みたいだし……私もこのへんで自分のこと考えるしおどきかも知れないね」
「なにバカなこと言ってるのッ。この家、出て行くとでも言うの？」
「お父さん、あの女将が好きなのよ。私が居据わってたら、一緒になれないじゃない」
「よしてよ。ここはお姉ちゃんの家なのよ、誰に遠慮がいるの。一生大きな顔していればいいの。することがなくなったから出てくなんて……何ひがんでるのよ」
綾は美人でスタイルがいい。姉が結婚できないのは、外観にコンプレックスがあるから

だと見抜いている。妹の言わんとすることを察して、「失礼ねぇ」と、加世は苦笑した。
「よくそんなことが言えるわねぇ。私が好きでこの家にいるとでも思ってるの？　私だってこの家出て好きなことしたいわよ。けど、長女の私が自分勝手なことしたら、申し訳ないと思うから、黙って我慢して、みんなの面倒もみてきたんじゃないの」
「ここ出て、どうするって言うの？」
「お嫁にいくの」
「お姉ちゃんッ、悪い冗談はやめて。突っ張って、負け惜しみ言わなくたって……」
「私はもう三十五よ。とっくに結婚適齢期はすぎてるわ。けど、三十五歳の女には、三十五歳の女にふさわしい相手がいるの。私はあきらめてたけど、彼は待ってくれてたの」
綾はまじまじと姉の顔を見た。ちょうどそのとき、信太郎がガバッと顔を上げた。
「飯出来た？　加世、一緒に食おう」
「お父さん、お姉ちゃん、お嫁にいくんだってッ」
綾が言うと、信太郎は即座に、「バカッ」と綾を叱った。「お姉ちゃんを追い出すようなこと言うんじゃない。加世のことは、父さんが面倒みる。嫁にいって苦労することなんかないッ。父さんがこれからうんと稼いで、贅沢させてやる。さ、一緒に飯を食おう」
そう言いながらも、またもやテーブルに突っ伏して眠り込んでしまう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com